第　４２　号

平成１７年2月１日発行

寿楽院寺報

〒369-1245 大里郡花園町荒川983
高野山真言宗　荒澤山 寿 楽 院
住 職　髙 橋 敬 行
電話　048-584-0302

今年のお正月は　！

人　もし生きること　百年ならんとも
無上の法を　見ることなくば
無上の法を　見る人の
一日生きるにも　およばざるなり

これは法句経の中の一節です。簡単に説明しますと「百歳まで長生きしても、仏教の教えを知ることがなかったなら、仏教の教えを知って一日生きた人にもおよばない。」と言う意味です。

私たちは、日々健康に気をつけて、一日でも長く生きることが幸せな人生を送ることだと思っています。しかし、お釈迦さまはそんなことより、仏教の教えに触れることがなければ、いくら長生きしても意味がないとおっしゃっています。折角、得がたき人身を得て生まれてきても、ただ漫然と生きているだけでは、命の浪費をしているだけです。

何のためにこの世に生まれてきたのか。どう生きたら幸せになれるのか。その答えを見つけなければなりません。その答えがどこにあるのか、それは言うまでもありません。お大師さまの御教えの中にあるのです。私たち、真言宗末徒はお大師さまの御教えを糧として生きることです。

今年のお正月は、ただ健康祈願だけでなく。お大師さまの御教えに触れた生き方ができますようにとお祈りいたしましょう。

それが本当の意味で『人が幸せになれる』生き方なのです。

一、人間には欲があるから成長できる
二、人間には迷いがあるから賢くなれる
三、人間には苦しみがあるから強くなれる
四、人間には知恵があるからすべてのものを活かしてよりよい人生を生きることができる

合　掌

高野山真言宗 いかせ いのち より

平成１６年の夏です。緑がいきいきと鮮やかでした

本年、京都大仏師、松本明慶氏からいただいた年賀状を取り込んだ菩薩像です

いただいた年賀状画像の酉と酉年守り本尊の不動明王です

空海の言葉　シリーズ

香を執れば自ら馥し、衣を洗えば脚浄し

★香をもっているだけで、自分の体からよい香りがあふれる川に入って衣を洗えば足まで清浄になる

法事やお葬式の席に座っていて、正装した僧侶が傍を通ると、なんともいえない芳しい香りがします。しかしこれは、僧侶の体からそのような香りがするというわけではなく、着ている衣が芳しい香りを発するのです。それは移り香であって、衣たんすにはいつも、伽羅、沈香、白檀などの木片を入れておくから、その香りが移るのです。そのうえ、僧侶は塗香という手のひらに塗るお香をいつも身につけていて、お経を読むときは必ずそれを手に塗って清めるのです。

さて、衣は仏さまの着るものですが、どんなに高貴な香りのする衣でも、やはり長く着ていると汚れてしまいます。そこで、川に入って衣を洗いますと、洗っている人の足まで清らかになる、と弘法さんはいわれるのです。

いつも善いことをしていると、ひとりでに自分に善いことがやってくるのです。よく、広域暴力団の仲間に入った連中が、「泥沼に突っ込んだ足が抜けなくなった」とか、「足を洗いたいんだが……」とかいうのを聞きます。それは少しも難しいことではありません。そのまま泥水の中にいても、毎日、世のためになる善いことばかりをやっていれば、自然に足が洗えてきれいになります。泥だらけの大根を泥水の中で洗ってもきれいに洗えるようなものです。泥だらけの大根ですらそうなのですから、まして、気高い衣を洗えば、足どころか魂まで清らかになるのは当然です。

（日本文芸社空海のことばより）